

埋蔵文化財緊急調査事業に係る
埋蔵文化財調査報告

富山県婦中町
千坊山遺跡(3)

1998年3月

富山県婦中町教育委員会

序

千坊山遺跡のある丘陵は、古くから遺物が散布することが知られていました。そして、昭和49年に長沢バイパス工事に先立つ試掘調査で弥生時代末の竪穴住居跡が4棟発見されて以来、これまでに6回にわたる調査が実施されてきました。本書は、そのうち平成8・9年度に行った丘陵西部の試掘調査の成果を報告するものであります。

これまでの調査で、本遺跡は旧石器から中近世に至る遺物が散布する複合遺跡であり、弥生時代末の竪穴住居跡群や中世の方形塚状造構・館跡など多時期にわたる遺構が遺存する内容の濃い遺跡である事が分かりました。

また、本遺跡は北に杉谷古墳群、南に富崎城墨群、西に国指定史跡の王塚・県指定史跡の勅使塚古墳・各願寺などといった数多くの文化遺産に囲まれています。この遺跡は、古くから繁栄してきたこの地域の歴史を知る上からも重要であり、当教育委員会ではこうした貴重な遺産を大切に保存していきたいと思っております。

おわりに、この調査にあたり、ご協力頂きました地域の方々、関係機関の皆様に心より感謝申し上げると共に、今後ともご指導ご協力賜りますようお願い申しあげます。

平成10年3月

婦中町教育委員会
教育長 宮 島 信 一

例 言

- 本書は、富山県婦負郡婦中町長沢・新町・羽根地内に所在する千坊山遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
- 本事業は、「埋蔵文化財緊急調査事業」によって実施した。
- 調査の期間と面積は次のとおりである。

平成 8 年度調査	調査期間	平成 8 年11月18日～同年12月26日（実働27日）
	調査対象面積	約2,000m ²
	発掘調査面積	約212m ²
平成 9 年度調査	調査期間	平成 9 年11月11日～同年11月28日（実働10日）
	調査対象面積	約660m ²
	発掘調査面積	約70m ²

- 調査体制は次のとおりである。

調査委員会	婦中町文化財保護審議委員	須山盛彰
	婦中町文化財保護審議委員	西井龍儀
	富山県教育委員会文化課長	柳瀬佳明
	富山県埋蔵文化財センター所長心得	岸本雅敏
	婦中町史編纂委員	久保尚文
	古里地区自治振興会長	若林 幸
	古里公民館長	沢村栄義
	婦中町教育委員会教育長	宮島信一
調査事務局	婦中町教育委員会生涯学習課長	鍋山 徹
	婦中町教育委員会生涯学習課文化振興係長	山田茂信
調査担当者	婦中町教育委員会生涯学習課文化財保護主事	片岡英子

なお、作業員の確保については婦中町シルバーパートナーセンターの協力を得た。
- 資料の整理、本書の編集と執筆は調査担当者が当たった。
- 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略五十音順)
越前慶祐・大平奈央子・久々忠義・島田修一・高橋真実・西井龍儀・宮崎順一郎
- 本書の挿図・写真図版の表示方法については、方位は真北、水平基準は海拔高、遺構の表示は次の記号を用いた。
土坑：SK、溝：SD、ピット：SP、不明遺構：SX
出土品および記録資料は婦中町教育委員会が保管している。
- 発掘調査・資料整理参加者は次のとおりである。
生田寿美子・中坪千春(整理作業員)、匂坂友秋・河西英津子(嘱託)、三浦智徳・近藤美紀・小島あすか(整理補助員)

本文 目 次

序 文	(2) 遺構
例 言	(3) 遺物
目 次	2 平成 9 年度調査
I 遺跡の立地と歴史的環境	(1) 概況と層序
II 調査の経緯と経過	(2) 遺構
1 調査に至る経緯	(3) 遺物
2 調査の経緯と方法	3 その他の採集・出土遺物
3 座標軸の設定	IV まとめ
III 調査の概要	参考文献
1 平成 8 年度調査	写真図版
(1) 概況と層序	報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の遺跡分布図及び遺跡一覧	第 7 図 平成 8 年度調査 断面図
第 2 図 試掘調査範囲と区割図	第 8 図 平成 8 年度調査 断面図
第 3 図 層序模式図(平成 8・9 年度共通)	第 9 図 その他の遺物採集・出土地点
第 4 図 平成 8 年度調査 遺物実測図	第 10 図 平成 9 年度調査ほか 遺物実測図
第 5 図 平成 8 年度調査 平面図及び横断図	第 11 図 平成 9 年度調査 平面図及び横断図
第 6 図 平成 8 年度調査 断面図	第 12 図 平成 9 年度調査 断面図

I 遺跡の立地と歴史的環境

婦中町は県中央部にあり、地形は西の丘陵部と東の平野部に二分される。本書で報告する千坊山遺跡は、丘陵部と平野部の境にある中位段丘に位置し、山田川左岸にある独立丘陵とその南麓を範囲としている。本遺跡は旧石器から中世に至る複合遺跡で、面積は約14.4haを測る。遺跡の現況は畑・林・墓地・荒れ地・グラウンド等で、西部は土砂採集によって削平されている。この一帯には県道八尾・小杉線に沿って集落が形成され、古くから栄えている。

奥羽丘陵沿いの一帯は遺跡の密集地帯となっており、千坊山遺跡はその延長線上に位置する。周辺の遺跡としては、繩文時代では竪穴住居跡が確認された各願寺前遺跡、弥生時代では南側丘陵にある富崎1号墓（四隅突出型埴輪墓）や南方の平野にある富崎遺跡等がある。また西方には古墳時代初期の前方後方墳である国指定史跡・王塚古墳や県指定史跡・勅使塚古墳がある。中世には「滝山城を中心とした山田川流域に出城群（第二次支城）が濃密に分布する」（高岡1997）ほか、遺跡の250m北西には丘陵地帯の仏教文化の中心をなしてきたと伝えられる各願寺がある。当時、長沢・富崎周辺は婦負郡における政治の中核部であったといわれている。



No.	遺跡名称	時代	10 新町横穴墓 古墳	20 長沢城跡 中世
1	千坊山遺跡	旧石・縄文・弥生・平安・中世・近世	11 新町丘遺跡 縄文・奈良・平安・中世・近世	21 銚坂丘遺跡 縄文
2	向野塚	不明	12 新町大塚古墳 古墳	22 銚坂Ⅰ遺跡 縄文
3	六治古塚	不明	13 滝／山古墳群 古墳	23 銚坂Ⅱ遺跡 中世
4	古井御前遺跡	縄文・弥生	14 新町丘遺跡 古墳・奈良・平安	24 古宮塚 不明
5	各願寺前遺跡	縄文・奈良・平安・中世	15 新町1遺跡 奈良・平安	25 蓮華寺遺跡 中世
6	五つ塚	古墳	16 二木坂遺跡 縄文・奈良・近世	26 外船野1遺跡 中世
7	勅使塚古墳	古墳	17 下邑東遺跡 平安	27 富崎城跡 縄文・弥生・中世
8	王塚古墳	古墳	18 菅谷城跡 中世	28 富崎遺跡 弥生・古墳・古代・中世・近世
9	王塚古墳北遺跡	縄文	19 家老屋敷城跡 中世	29 上吉川1遺跡 古代・中世・近世

第1図 周辺の遺跡分布図 (1/20,000) 及び遺跡一覧

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

千坊山遺跡のある丘陵は、古くから遺物が散布することが知られていた。昭和49年に初めての試掘調査が行われて以来、これまでに6回にわたる調査が実施されている。それらの調査内容は次のとおりである。

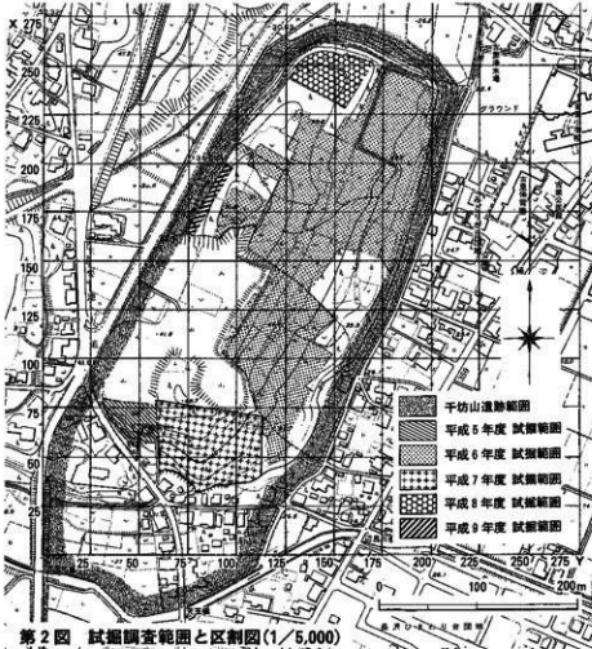
昭和49年5月	長沢バイパス工事に先立つ試掘調査を実施。対象面積は14,776m ² 、発掘面積は133m ² 。弥生時代末の竪穴住居跡が4棟確認され、歴史的環境からもその重要性が推測された為、路線が変更された。
平成5年6月	丘陵南西部で、長沢稲荷神社建て替え工事に先立つ試掘調査を実施。対象面積は986m ² 、発掘面積は87m ² 。明治年間の旧境内造成時の削平で、遺構は遺存していないかった。現在は新神社が建つ。
平成6年4月～12月	遺跡発掘事前総合調査事業により、分布・試掘調査を広範囲に実施。対象は72,000m ² 、発掘面積は6,080m ² 。丘陵北半部に弥生竪穴住居跡25棟、南東部に中世塚状遺構等、多くの遺構・遺物を確認。
平成7年10月～11月	埋蔵文化財緊急調査事業により、丘陵南部の積み石を施すテラス状遺構を試掘調査。対象面積は7,000m ² 、発掘面積は1,421m ² 。堀・土壘を巡らせた中世の館跡を確認。中世を中心に、縄文・弥生・近世の遺物が出土。また丘陵南側裾部で行った分布調査から遺跡範囲が南に伸びる事が判明。
平成8年11月～12月	埋蔵文化財緊急調査事業により、丘陵北西部のテラス状地形を試掘調査。対象面積は2,000m ² 、発掘面積は212m ² 。土坑・溝などを確認、遺物は縄文を中心に弥生・中近世のものが出土した。
平成9年11月	埋蔵文化財緊急調査事業により、丘陵西部の旧石器・縄文草創期遺物散布地点周辺を試掘調査。対象は660m ² 、発掘面積は70m ² 。土坑を確認。遺物は縄文を中心に弥生・古代・近世のものが出土。

2 調査の経過と方法

調査では掘削作業に先立ち、対象地区の雑木や草の伐採作業を行い、それらを安全な場所で焼却した。その後、幅約1.1mのトレーニチを平成8年度は8本、平成9年度は5本掘削した。両調査とも調査対象地区が植林の中に位置していた為、掘削・埋め戻しについては立木を傷つけないよう人力で行った。調査委員会は平成9年度の調査後に実施し、調査の結果報告と今後の方向性の検討を行った。

3 座標軸の設定

座標軸は昨年度と同様で、国土地理院設定の公共座標第7系のうちX = 72.00km・Y = -3.64kmの点を0原点として設定し、東西をY軸、南北をX軸とした。1グリッドは2mを単位とした。



第2図 試掘調査範囲と区割図(1/5,000)

III 調査の概要

1 平成8年度調査

(1) 概況と層序

調査対象区は丘陵北西部にあり、現況は林になっている。調査区内の標高は44.00~47.50mを測る。トレントは各平坦面に垂直または平行になるように設定した。

平成8・9年度の調査区の基本的層序は上から順に、A層(表土) : 黒褐色土、B層(旧表土) : 黒褐色土、C層(漸移層) : にぶい黄褐色シルト、D層: 1明黄褐色土やや粘質、2黄褐色シルト、E層(地山) : 1にぶい黄褐色シルト+白色岩粒状、2疊、F層(盛土) : 1黒褐色土+地山粒状、2黒褐色土+地山ブロック状となる。遺構にはB層を切る新しいものとC層に掘り込まれるものがある。

(2) 遺構

調査によって確認した主な遺構は土坑・溝である。掘り込みのうちには木の根や畑作・植林の影響と考えられるものも多い。遺構は基本的に掘削していないが、セクション図をとる側のみ壁から幅約15cmを掘削し深さを確認した。

土坑 しっかりとした土坑は殆ど、調査区の北半分に位置する。

S K02は、東西軸470cm・南北軸300cm・深さ最大95cmと大きい。壁はすり鉢状に広がり、覆土は黒褐色シルトの上に疊混ざりの地山がレンズ状に堆積していた。風倒木痕である可能性が考えられる。

S K03・25・31は焼土が検出された土坑である。S K03は南北軸50cmを測るが、深さは未確認。S K25は東西軸80cm・深さ85cmで、壁が直立し底は平らである。S K31は東西軸145cm・深さ45cmで、底は平らである。覆土は縦に分割されるようにして2層に分かれ、両層とも焼土・炭粒を含んでいた。縄文土器が出土した。

S K04・27・34・33は平面形が隅丸四角を呈し、深さがあり、壁は直立もしくはオーバーハング気味で、底が平らな土坑である。S K04は南北軸100cm・深さ45cmで、覆土は単層。S K27は確認できる東西幅が120cmで、深さが75cmを測り、覆土は4層がレンズ状に堆積する。S K34は南北軸95cmを測る。深さは未確認だが、規模・形状などが1m南にあるS K04に似る。S K33は東西軸95cm・深さ70cmで、下層には地山が粒状に混じる。

S K30は平面形がほぼ円形になるとされる、最大径は130cmを測る。深さは未確認。周辺から縄文土器・弥生土器・瓦器・中世土器・唐津・近世磁器が出土している。

S K32は東西幅95cmで深さは20cmと浅い。縄文土器が多く出土した。

溝

S D07・08・09・10・13・14はB層を切り、等高線に平行に走る。平均規模は幅40~50cm・深さ30~40cmを測る。

S D06は幅50cmで直角に曲がる。北端に径40cm程度の窪みがある。

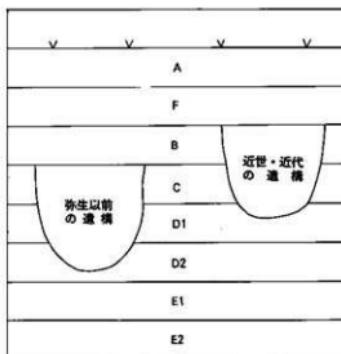
その他

S X01は幅150cm・深さ120cmで、壁はオーバーハング気味で、底は平らになる。最下層の覆土に炭が入り、底面には炭化した木の塊を検出した。周辺より剥片・弥生土器・骨壺もしくは花瓶と思われる近世陶器が出土した。

(3) 遺物

調査で出土した遺物は、縄文土器・磨製石斧・剥片・弥生土器・中世土器・瓦器・唐津・近世陶磁器である。

1は剥片で、鉄石英製である。T 5のS X01周辺より出土。



第3図 層序模式図(平成8・9年度共通)

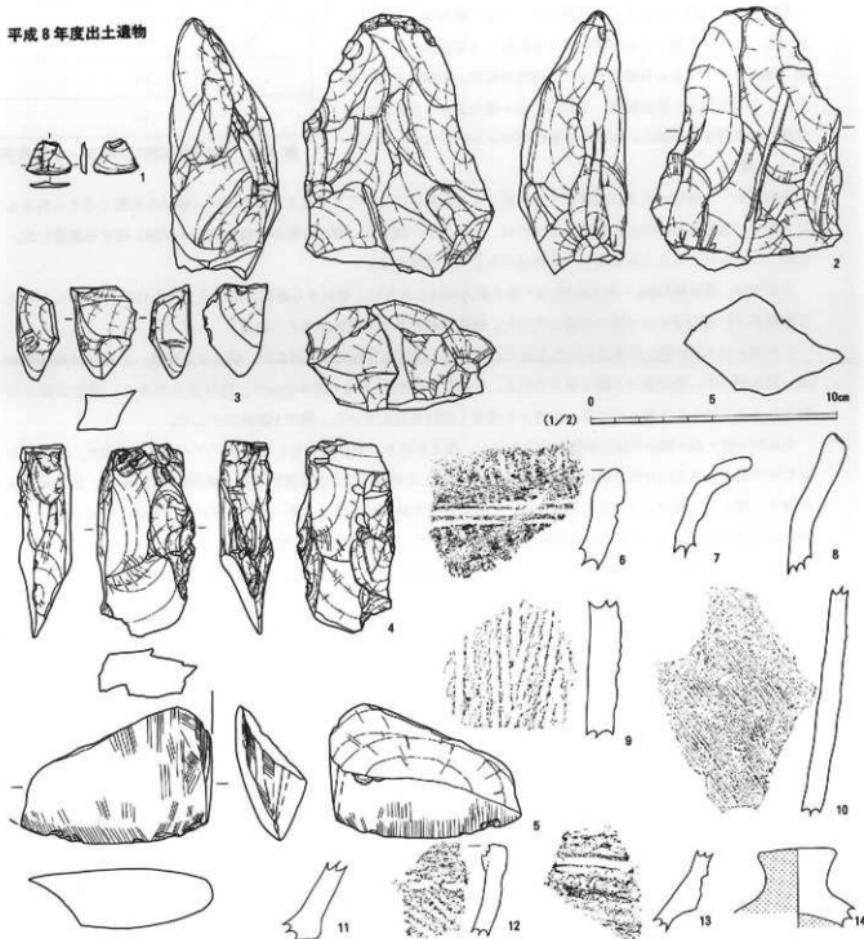
2・4は石核。2は安山岩製で、大型の横長剥片を剥離している。縄文草創期のもので、T1南側で出土した。4は硬質泥岩製で、不定形で寸づまな剥片を剥離している。3の剥片は4と同一母岩で、ともにT3中央部で出土。

5は磨製石斧で、蛇紋岩製である。半分以上欠損し、刃部側のみが残存する。T3中央部で出土。

6～13は縄文土器である。6はキャリバー形土器の口縁部で、外面に沈線、内面上端にキザミ目が施されている。7は波状口縁部である。8は口縁部で上端を刺突している。9は胴部で、木目状撚糸文を施す。10は胴部で、条痕を施す。11は底部。12は口縁部で、内面に粘土を折り返す。節の細かいRL縄文を施す。13はキャリバー形土器のくびれ部で、外面に沈線と、突堤に爪形文を施す。

14は弥生土器の蓋である。環状のつまみで、内外面をヘラで磨き赤彩を施す。T5 SD14・SK30付近より出土。

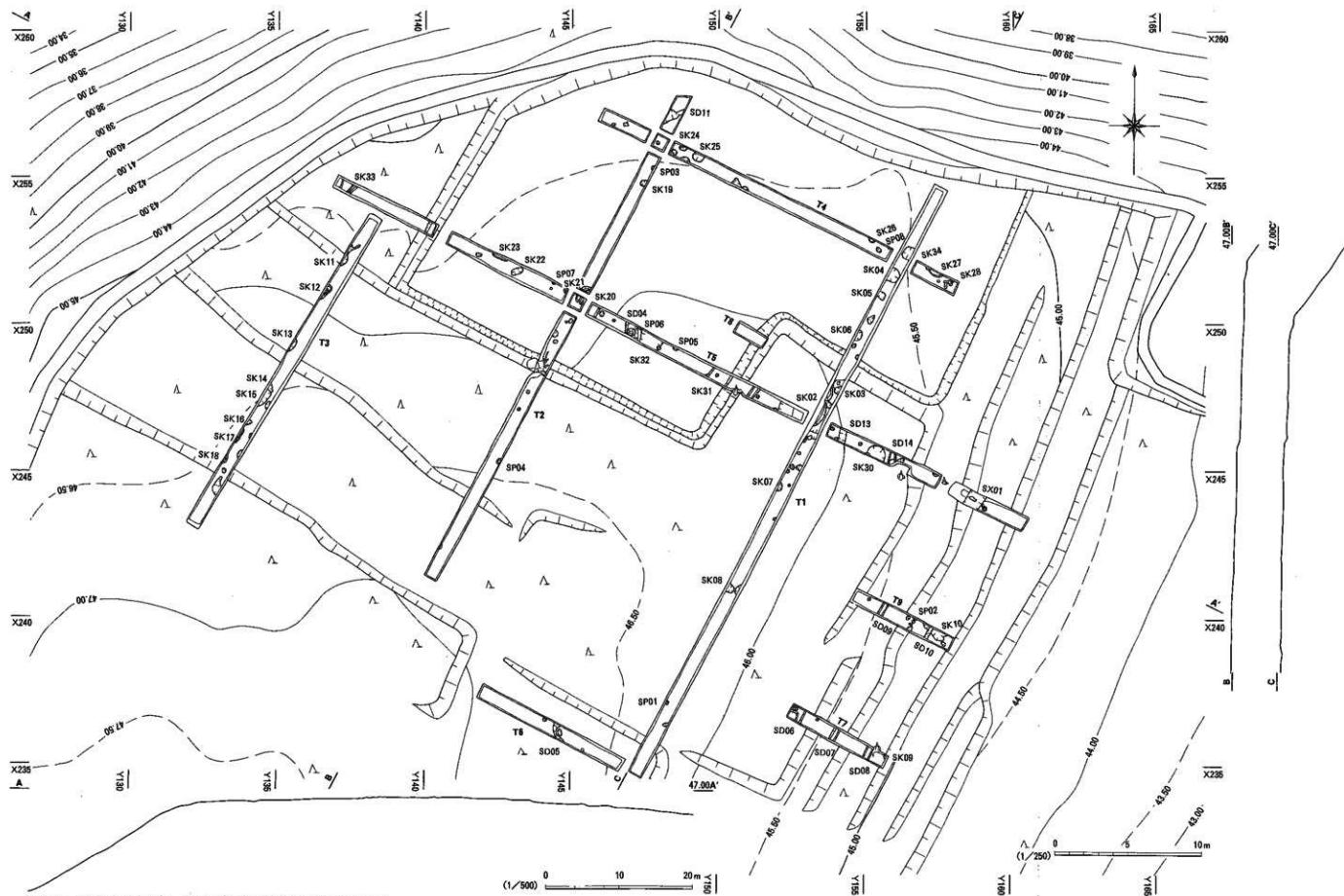
平成8年度出土遺物



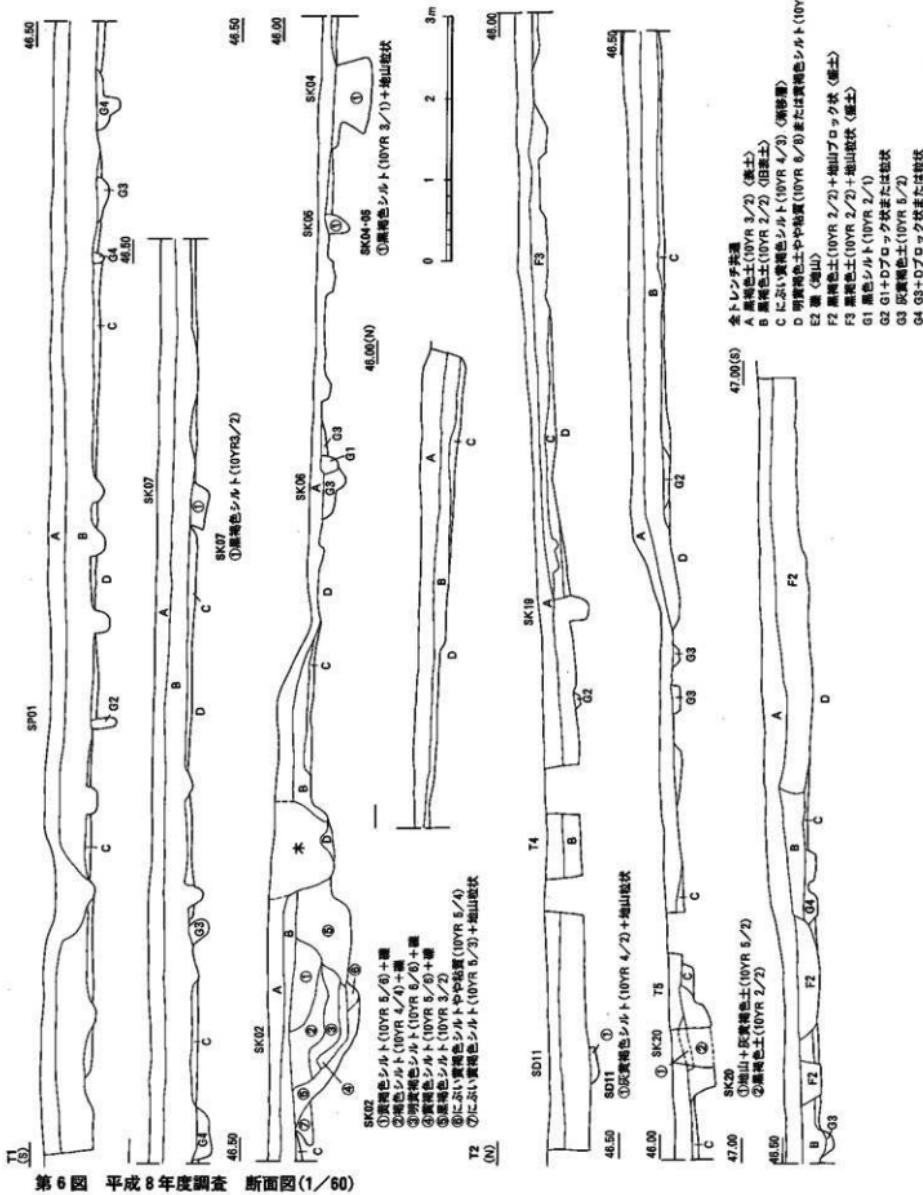
第4図 平成8年度調査 遺物実測図(1/2)

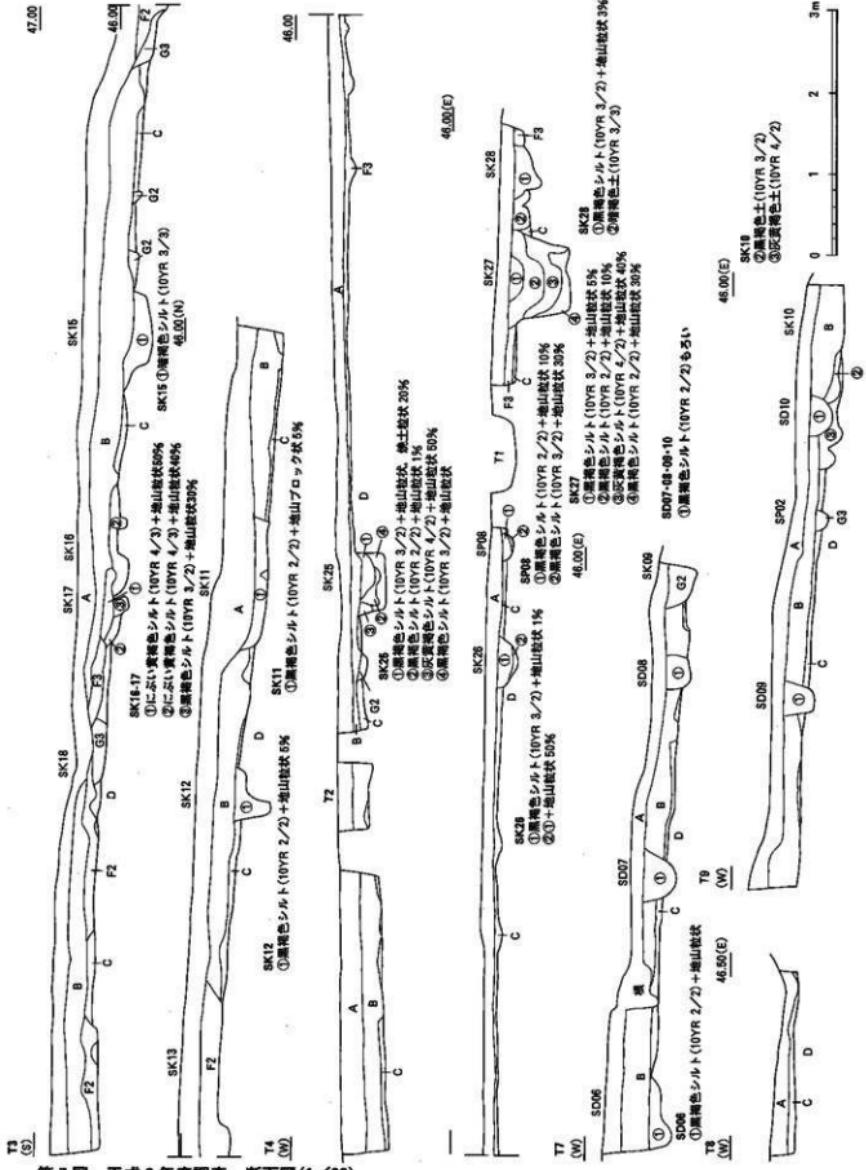
T1 南側：2, T3 北端：8, T3 中央：3・4・5, T5 SK01付近：1

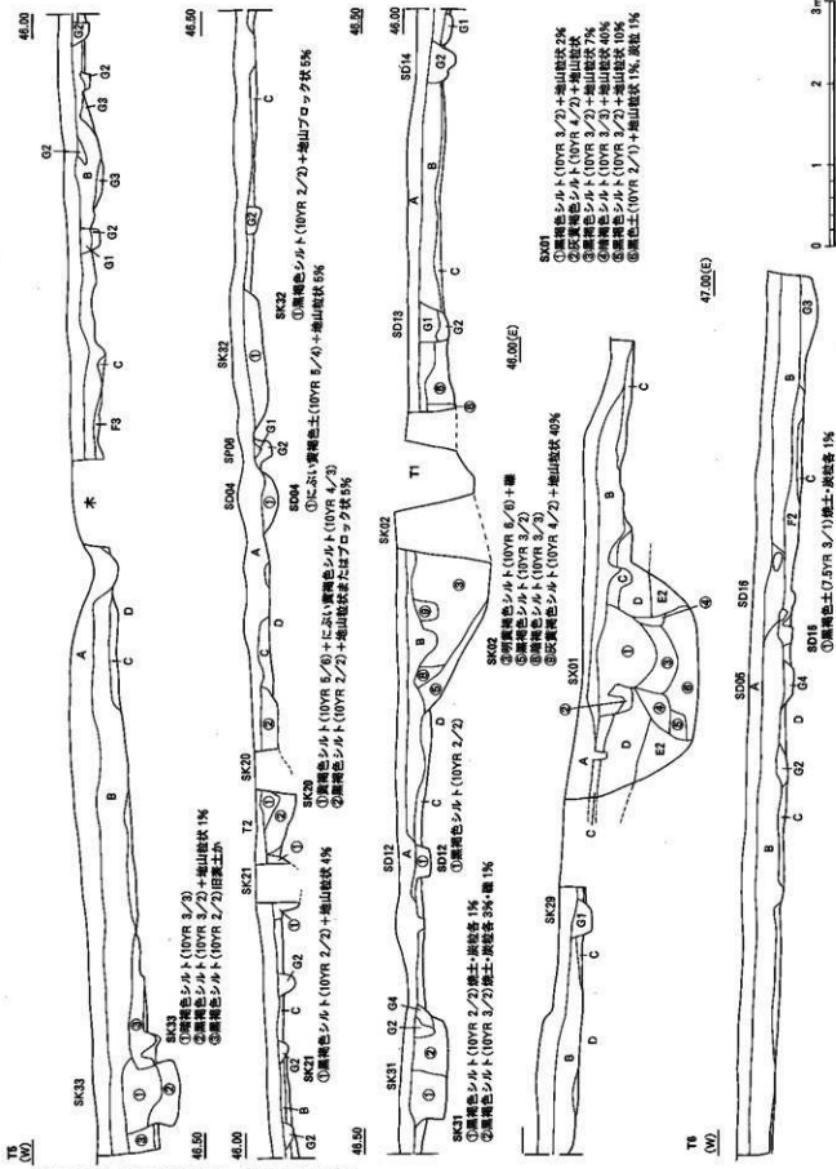
T5 SD14・SK30付近：14, T5 SK31：11・12, T5 SK32・SD04付近：6・7・9・10・13



第5図 平成8年度調査 平面図(1/250)及び横断図(1/500)







第8図 平成8年度調査 断面図(1/60)

2 平成9年度調査

(1) 概況と層序

調査対象区は丘陵北西部斜面にあり、杉が植林されている。西井氏がナイフ型石器を採集した地点【西井・藤田1976】を少し西に下った所に位置する。南方は昭和45年の土砂採集によって大きく削平されており、地元住民によると削平以前は尾根の稜線が丘陵西寄りに長軸に平行して通っていたようである。トレンチ設定箇所は植林に制約されたこともあり、丘陵西端の落ち際に設定した。対象区内の標高は49.00~50.50mを測る。基本層序は平成8年度調査記述箇所を参照されたい。この調査では旧石器時代の遺物が出土する可能性がある赤土(D1・D2)も掘り下げた。D1上面の標高は49.15~49.60m、E1上面の標高は48.70~49.40m、調査区南側では標高49.10mで礫層が出る。

(2) 遺様

S K01・02はB層を覆土とし、緩やかに落ち込む浅い土坑。木の根の影響によるものである可能性もある。

S K03はB層を掘り込み、覆土に炭灰・焼土が混じる。

S K04はF2層を掘り込み、覆土に粒状の地山が多く混じる。北側の底には10~15cm大の石が数個落ち込んでいた。

(3) 遺物

調査で出土した遺物は、エンドスクレイバー・ピエスエスキュー・剥片・石鏃・縄文土器・弥生土器・須恵器・経筒蓋・越中瀬戸・伊万里である。土器の多くは小破片で出土する。

15はエンドスクレイバーで、チャート製である。刃部の肩が張るタイプ。

16はピエスエスキューで、鉄石英製である。

17~21は剥片で、石材は17・21は玉髓、18・19は鉄石英、20はチャートである。18・19・20は一部欠損している。

22は石鏃である。チャート製で、抉り込みがカーブを描く。片側が欠損する。

23~26は縄文土器である。23は縦位のR L縄文を施す。24・25は口縁部、26はくびれ部である。

27は弥生土器で、器台の脚部である。外面はヘラ磨き、内面は磨滅している。

28は須恵器の肩部破片である。

29は縫製の経筒の蓋である。つまみ周辺のみが遺存し、変形している。中世のものと考えられる。

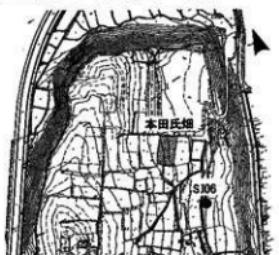
30は越中瀬戸の小皿である。釉は灰釉を薄く掛け、内壳で外底面は無釉である。削り込み高台。

3 その他の採集・出土遺物

39以外は丘陵北側にある本田氏の畠から表探もしくは農作業中に出土したものである。この場所には過去にトレンチ調査を行っていないかったが、土器が多出することから、ここにも弥生時代末の堅穴住居跡が存在するものと思われる。39は平成6年度に試掘調査したS I 06付近の烟より表探されたものである。

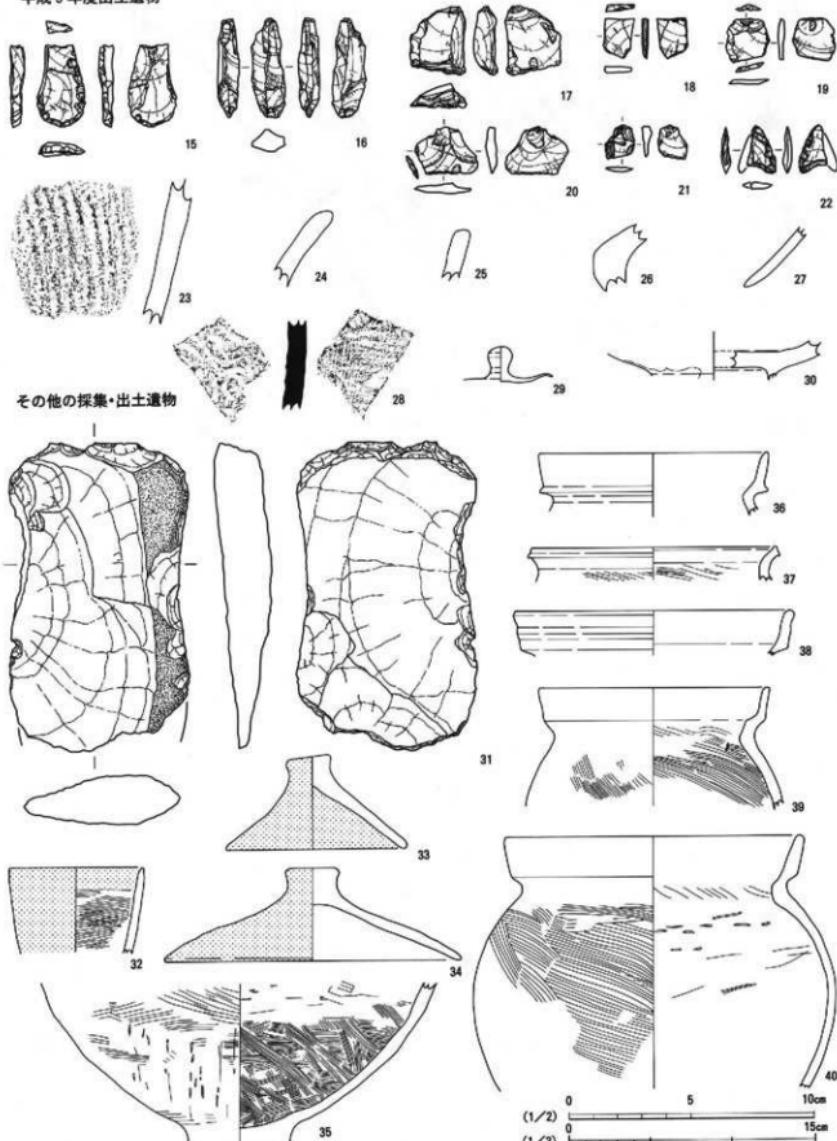
31は花崗岩製の打製石斧である。短冊型で刃部が欠損する。背面には原砾面を広めに残しており、側面には敲打による調整がなされている。

32~40は弥生土器である。32は細長頸壺。やや外反して立ち上がり、外面はヘラ磨き、内面は口縁部以外横方向のハケ目が残る。また外面と口縁部内面には赤彩を施す。33・34は環状のつまみがつく蓋。34は内面が磨滅しているが、双方内外面をヘラ磨きし赤彩を施していたものと考えられる。35~40は壺。35は底部で、内面は横方向のハケ、外面はハケの後下方向にヘラ削りを施す。37はくの字に外反する口縁部で、端部を面取りする。36~40は複合口縁で、口縁部は全て横ナデ、37・39は肩部内外面に横方向のハケ、40は肩部外面に横方向のハケ、内面に横方向のハケとヘラ削りを施す。



第8図 その他の遺物採集・出土地点(1/5,000)

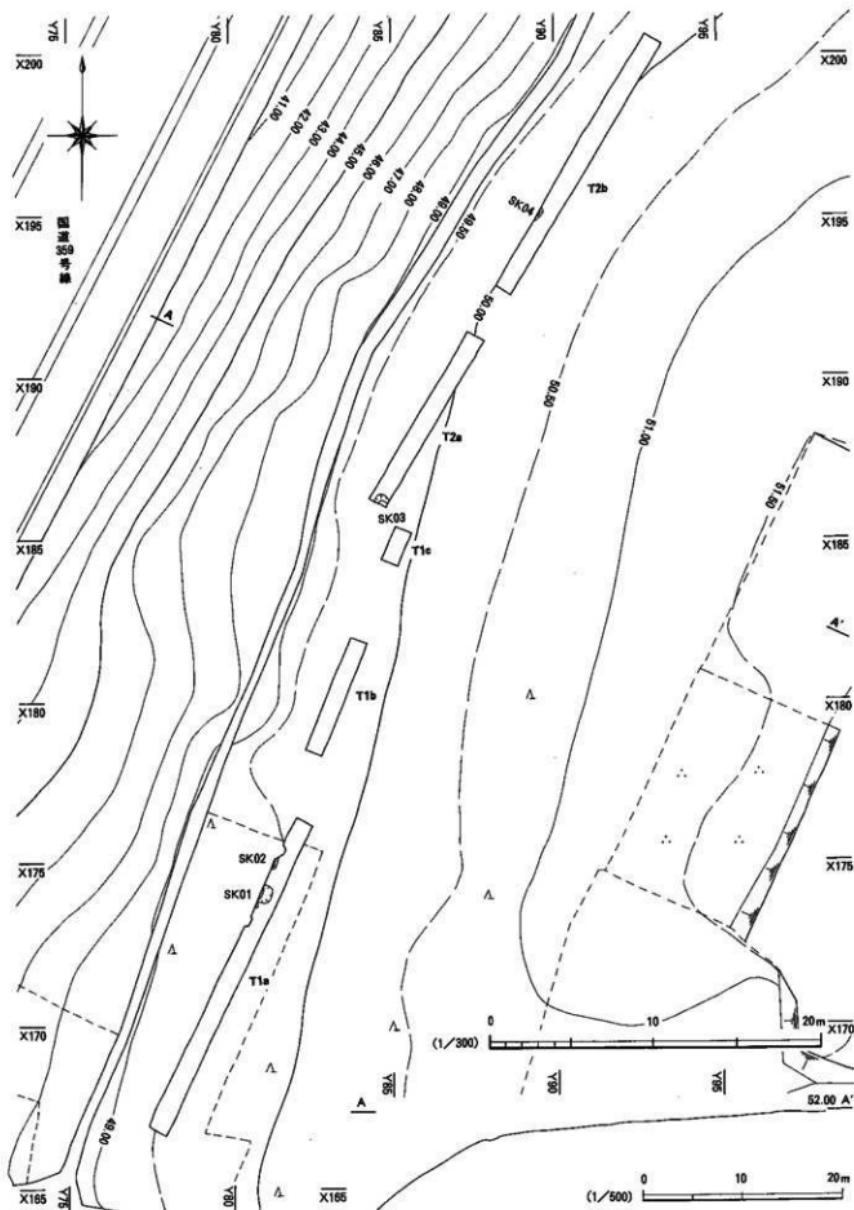
平成9年度出土遺物



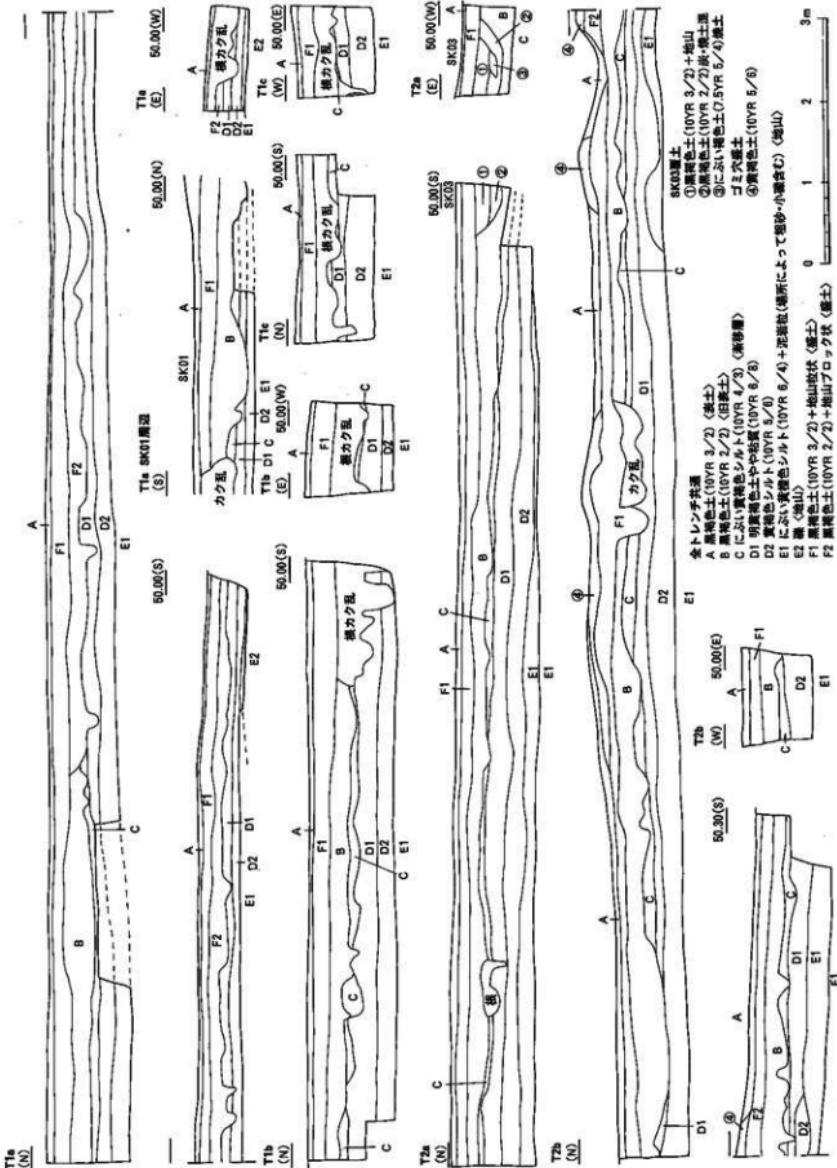
第10図 平成9年度調査ほか 遺物実測図(15~31は1/2, 32~40は1/3)

T1a : 15・17・22, T1b : 16・20・21・23・27, T1c : 18, T2a : 19・24, T2b : 26・25・29・28・30

本田氏寄贈遺物 : 31~38・40, SI06付近表探 : 39



第11図 平成9年度調査 平面図(1/300)及び横断図(1/500)



第12図 平成9年度調査 断面図(1/60)

IV まとめ

平成8年度調査では、調査前に予想していた弥生時代の住居跡は確認されなかった。当地区から出土した遺物は縄文時代を中心とするもので、同じ丘陵北半部でも弥生時代中心の平成6年度調査区とはやや内容が異なっていた。なお、調査前に遺構の可能性も考えていた平坦面や階段状の地形については、整地後に意識的に配置されたような遺構が無く、後世の植林や畑作等によるものと考えられた。

一方、平成9年度調査では、旧石器時代の遺物が出土する可能性のある赤土を礫・粗砂が混じる面まで掘り下げたが、その時期の遺構や遺物は確認できなかった。旧石器時代の状況を把握するには周辺の調査が必要と考えられるが、この一帯には植林が広がっている為、現時点での調査は不可能である。ところで当調査区の出土遺物では、縄文時代の遺物が占める割合が多かった。平成6年度調査でも今年度調査区の東側上方に、縄文時代の遺物の散布が認められており、周辺に縄文時代の居住区があったとも考えうる。しかし、平成6年度・9年度ともに、当期の遺構と断定し得るものは確認されていない。そのほかに、平成9年度調査では、中世の経筒の蓋や近世の藏骨器と思われる土器の破片が出土した。これに関連するかどうかは定かでないが、調査区東側上方には地元で「山田稚太夫の墓」と伝えられる低い高まりがある。そしてそれを区画するようにL型に並べられた石造物残欠群には中世に遡るものもある。これらは昭和になってから羽根にある禪宗の無門寺から移してきたもので、中央部には最近建てられた宝篋印塔もある。表面には、藏骨器を含む、近世から現代の陶磁器が散布している。

平成8・9年度調査区では、これまでの他地区の調査内容と比較すると、その中心時期が縄文時代にあることが共通点として挙げられる。このことから縄文時代は主に丘陵西側斜面に営みの中心があったと推測できるが、まだ遺構が確認されていない上に、出土土器が小破片ばかりという点が気にかかる。

千坊山遺跡では、これまで丘陵部の広範囲に試掘調査を行ってきた。調査の結果から、本遺跡における居住空間の遺地は時代別に異なっていることが推測出来た。旧石器・縄文時代には東に連なる丘陵や谷部が見える丘陵西側斜面を、弥生時代には平野が眺望できる丘陵北半部東側斜面を好んだようだ。また、丘陵南端の中世の屋敷は、南麓にある長沢集落を統括し易い位置にあるといえる。丘陵部のおおよその概観が把握できたところで、今後の調査による更に詳細な内容の解明に期待している。

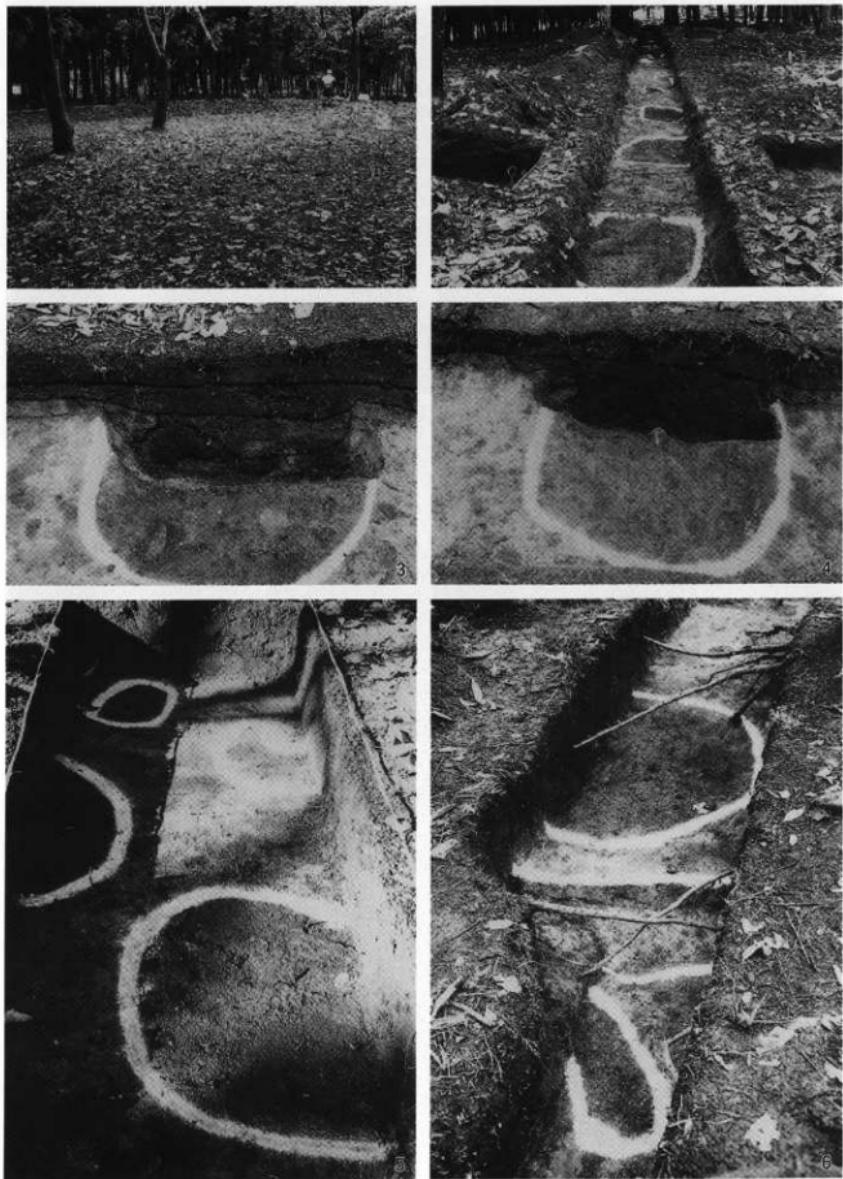
参考文献

- 高岡徹 1997『越中中部における戦国史の展開—神保長職から佐々成政まで—』
富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県埋蔵文化財包蔵地図』
西井龍儀・藤田富士夫 1976『奥羽丘陵周辺の先土器・縄文草創期の遺跡について』『大境』第6号
婦中町 1967・1996『婦中町史』
婦中町教育委員会 1995『千坊山遺跡(1)』
婦中町教育委員会 1997『千坊山遺跡(2)』
加藤晋平・小林達雄・藤本強1994『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣出版株式会社
加藤晋平・小林達雄・藤本強1995『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣出版株式会社



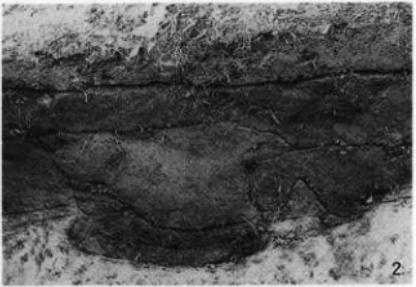
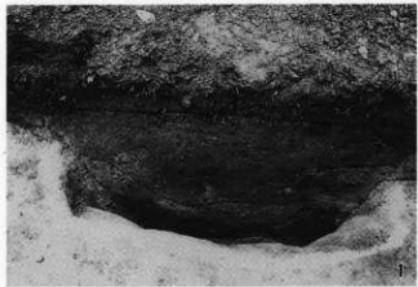
図版1 航空写真 (1/10,000)

国土地理院（昭和20年 米軍撮影）



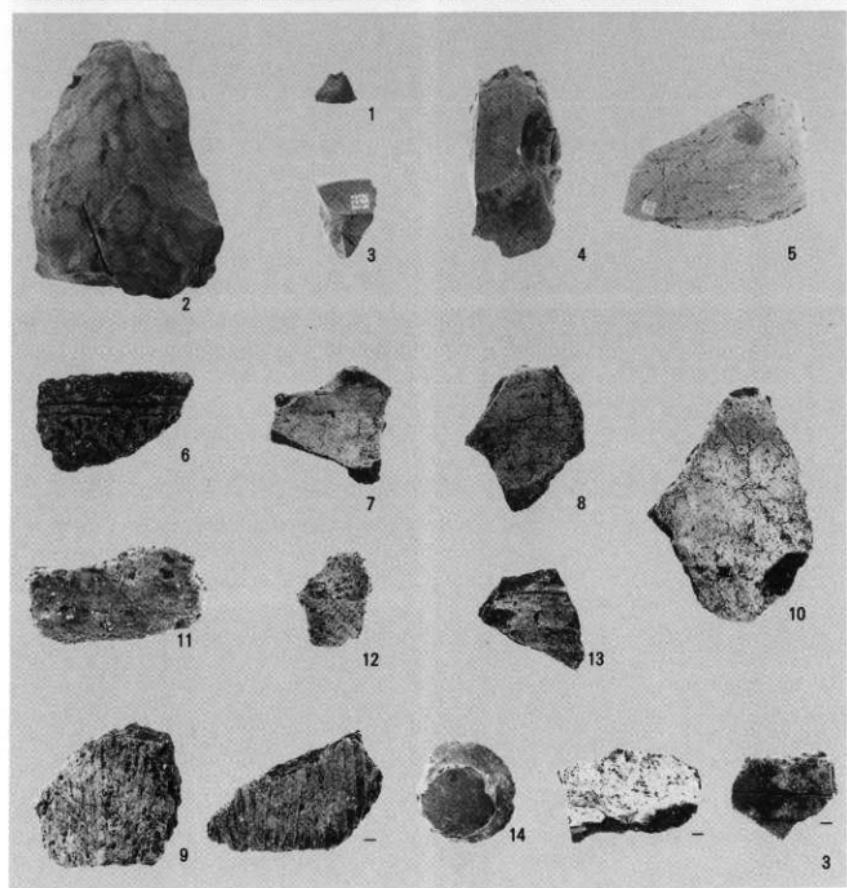
図版2 平成8年度調査

1. 挖削前状況(北から)
2. T1 SK04・05・06・34(北から)
3. T4 SK25(南から)
4. T1 SK04(東から)
5. T4 SK24・25(東から)
6. T5 SD13・14・SK30(東から)



図版3 平成8年度調査

1. T4 SK27 (南から)
2. T5 SK33 (南から)
3. T5 SK31 (南から)
4. T5 SX01 (南から)
5. T9 SK10+SD09-10 (東から)
6. T1 SK02 (南東から)
7. T7 SD06 (南東から)



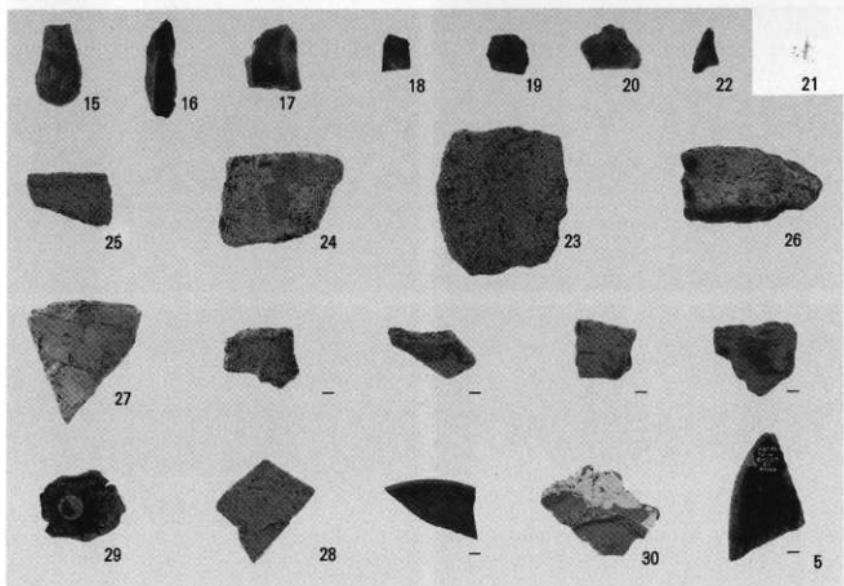
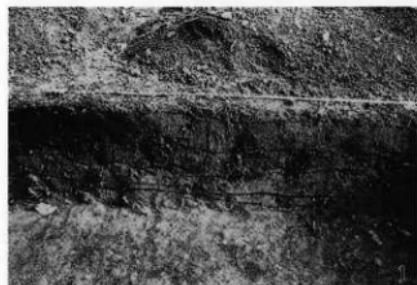
図版4 平成8年度調査

1. 雜木・落葉除去作業 2. 挖削作業 3. 平成8年度出土遺物 (1/2)



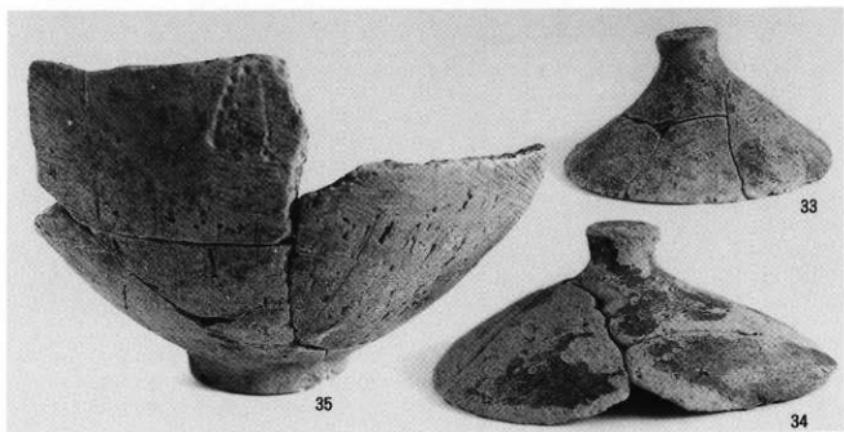
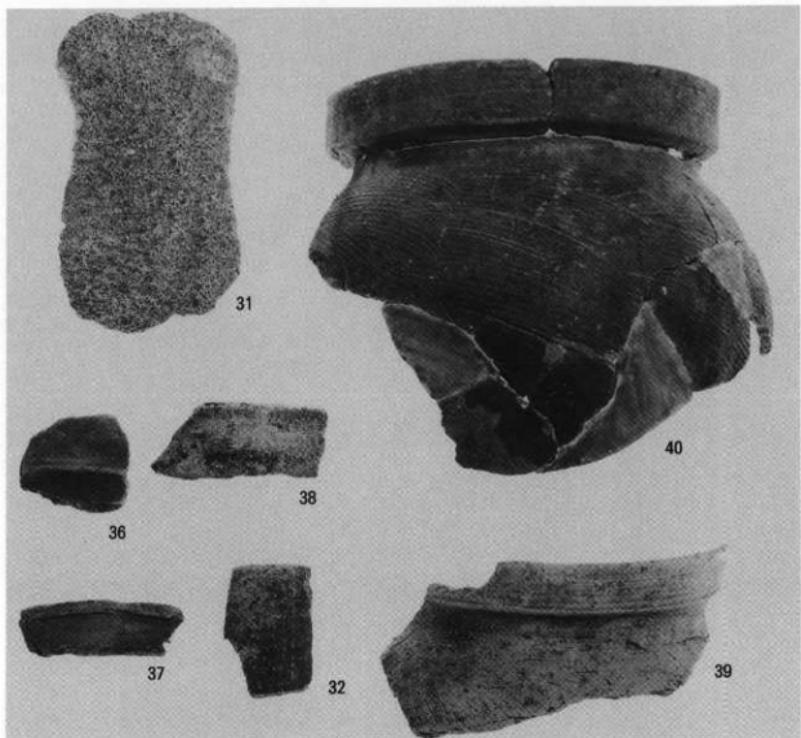
図版5 平成9年度調査

1. 挖削前状況(南から) 2. T1b(南から) 3・4. T1a SK01(東から) 5・6. T2a SK03(北から)
7・8. T2b SK04(東から)



図版6 平成9年度

1. T1a東壁 2. T2a東壁 3. 挖削作業 4. 伐採木焼却作業 5. 平成9年度出土遺物 (1/2)



図版7 その他の採集・出土遺物 (1/2)

報告書抄録

ふりがな	せんぼうやまいせき						
書名	千坊山遺跡(3)						
シリーズ名	埋蔵文化財緊急調査事業に係る埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	(3)						
編集者名	片岡英子						
編集機関	婦中町教育委員会						
所在地	〒939-2798 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL0764-65-2111						
発行機関	婦中町教育委員会						
所在地	〒939-2798 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL0764-65-2111						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯 ° °'	東 經 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
千坊山遺跡	富山県婦負郡 婦中町新町字 牛保山141 外	016362 029	36°39'06"	137°07'39"	平成8年度 971118～ 971226 平成9年度 981111～ 981128	平成8年度 対象面積 2,000m ² 発掘面積 212m ² 平成9年度 対象面積 660m ² 発掘面積 70m ²	埋蔵文化財 緊急調査事業
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
千坊山遺跡	集落	縄文 弥生	土坑、溝、ピット	平成8年度 縄文土器・磨製石斧・ 剥片・弥生土器・中世 土師器・瓦器・唐津 平成9年度 縄文土器・石鎚・剥片・ 弥生土器・須恵器・経 筒蓋・越中漸戸			

平成10年3月31日発行

千坊山遺跡(3)

編集 婦中町教育委員会
 発行 婦中町教育委員会
 富山県婦負郡婦中町速星754
 印刷 梅なかたに印刷